

INMP 通信 No. 19

2017年6月

編集:安齋育郎、山根和代

翻訳者:赤松敦子、栗山究、寺沢京子、吉岡志朗、山根和代



International Network of
Museums for Peace

北アイルランド・ベルファストでの第9回 INMP 国際会議



第9回INMP国際会議は4月10日～13日に北アイルランドのベルファストで開催され、成功のうちに閉会いたしました。22ヶ国から140名の発表者や団体代表が世界中から集まり、この会議に出席しました。この会議のテーマは「生きている平和博物館としての都市」でした。このテーマは、ベルファストが敵味方に分かれて争った荒れた街から、紛争後の癒しと和解の過程を通して平和の意識を高めた模範となる街へと社会的にも政治的にも変容したことを強調するために選ばれました。

歓迎会と開会式は、北アイルランドの国会議事堂の素晴らしい建物であるストーモントの大ホールで開催されました。その開会式の基調講演では、1976年のノーベル平和賞受賞者マイレッド・マグワイアが講師を務めました。

その翌日の会議は、この会議を快く引き受けられたウルスター大学の副総長兼学長パディ・ニクソンの開会の辞により幕を開けました。

開会後の全体会合の話題の中心は、分断された社会が、暴力的紛争を抜け出した後に、議論の目標となるような語り、回想、和解、癒しをどのように扱ってきたかということ、そしてこの過程において博物館はどのような役割を果たすことができるかということでした。同様の問題は、北

アイルランドだけでなく、世界の他の荒廃した地域にも見られるので、この後の会議の多くの発表やパネルディスカッションでの話題にも取り上げられていました。



〈写真〉ベルファスト市役所での市長と会議参加者 (エレイン・ヒル撮影)

この国際会議では、ベルファストの「困難」に関して、平和関係の遺跡を巡るピースウォークに参加したり、地元の博物館やNGOの活動センター、展示会を訪問したりする機会が提供されました。国際会議に先立つベルファスト市内ツアーでは、この地域の事情について詳しく紹介されました。また会議後の北アイルランド日帰り研修旅行も教育的で楽しい内容でした。この研修旅行では、デリー／ロンドンデリーも訪問しました。そこではバリーキャッスルにあるコリーメーラ・コミュニティという北アイルランドで最も歴史の長い平和と和解のためのセンターを訪問しました。また、ユネスコの世界遺産であるジャイアンツ・コーズウェイへのツアーもありました。

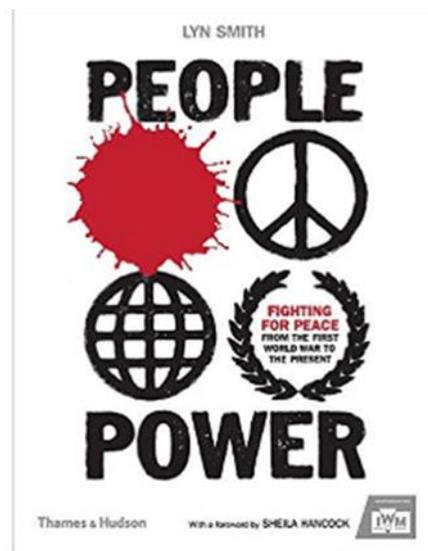
今回の国際会議は INMP の 25 周年と重なっていたため、二番目の基調講演の時間にはこのネットワークの過去を回顧し、現在を見つめなおし、未来を展望するシンポジウムが開かれました。そこで、ハーグのネットワーク本部事務局の管理者であるペトラ・ケプラーが INMP の歴史をコンピュータソフトウェアで描写した出来立ての映像が上映されました。ケプラーは祝賀晩餐会も開きました。その晩餐会では今年で一線を退くピーター・ヴァン・デン・デュンゲン INMP 統括コーディネータと理事である山根和代の過去 25 年間に渡る INMP への貢献が表彰されました。翌日の国際会議の夕食会は、ベルファスト市役所の素晴らしい環境の中で行われました。ベルファスト市長もこの夕食会に出席しました。夕食会での歓迎プログラムとして会議参加者による音楽演奏や詩の朗読、地元のベルファストで活動しているカボッシュ劇団による演劇が披露されました。この会議に派遣された 25 名の団体代表者(主に日本から、またイタリアやスペインからも参加)は、ベルファストでの会議が始まる前日に、ブラッドフォード平和博物館が提供した一日プログラムにも参加しました。また、1992 年に INMP の創立のための会議が開かれたブラッドフォード大学も訪問しました。INMP は、アルスター大学、ベルファストの観光情報センターであるビジット・ベルファスト、会議運営の様々な手配を担当したビスポウク・ノーザン・アイルランド社、そして地元の実行委員会の方々の支援のすべてに深く感謝します。また、非暴力行動トレーニングと教育のためのアイルランド・ネットワークのコーディネーターであるロブ・フェアマイケルにも感謝します。彼はベルファストでの会議についての詳しい報告書をまとめ、会議の様子についての写真をまとめたアルバムもアップロードしてくれました。報告書は[こちら](#)で、アルバムは[こちら](#)で見ることができます。

会議の議事録(発表者の方々から提供していただいた発表の要約、原稿全文、パワーポイントのスライドファイル、写真、ビデオ、その他の資料を含む)につきましては、[こちら](#)をクリックしてください。(赤松敦子訳)

帝国戦争博物館(ロンドン)での平和展示

3月23日から8月28日までロンドンの帝国戦争博物館は、「人々の力—平和のために戦う」という題で大規模展示を行なっています。これは第一次世界大戦から現在にいたるまでの反戦運動の進展を詳しく見ていく、この国で初めて開催される大規模な展示です。この展示は次の5つの年代に分けられています。(1)第一次世界大戦、(2)両大戦間期、(3)第二次世界大戦、(4)冷戦時代、(5)冷戦後。

この博物館所蔵の広範囲にわたる展示物のコレクションから選ばれた展示物に加えて、個人や団体のコレクションからも展示物を借りて展示しています。



ブラッドフォード平和博物館も、いくつかの展示物を提供しています。また、ブラッドフォード大学(同大所蔵「特別コレクション」)は、世界中で平和の象徴として有名になっている核軍縮キャンペーン(CND)のオリジナルの手書きロゴを貸し出しています。このロゴはこの展示会の広報のため、フルカラーで多数印刷されています。リン・スミスによって書かれた『人々の力—平和と戦う 第一次世界大戦から現在まで』(256 ページ テムズ・アンド・ハドソン社刊 ロンドン)には数多くの写真も掲載されています。より詳しい情報については[こちら](#)の1分間の予告編ビデオをご覧ください。また、[こちら](#)で音声や写真

の入った話や短編ビデオをいくつか見ることができます。(赤松敦子訳)

『戦争は体験しない者にこそ快し』暴力と戦争に対する抗議(赤松敦子訳)

反戦抗議の 500 年 反戦博物館 エラスムス展示、ベルリン

1517 年に偉大なオランダ人の人道主義者で平和主義者であるロッテルダムのデジデリウス・エラスムスは『平和の訴え』を出版しました。その本は、500 年前それが書かれた当時と同じように今日でも議論されていることに直接関連する重要な内容を伝えています。この本を出版する 2 年前に、彼はもう一つ、戦争に対する痛烈な批判を『戦争は体験しない者にこそ快し』に書いていました。この本だけでもベルリンの反戦博物館がその主題について特別展を開催した理由として十分と言えるでしょう。

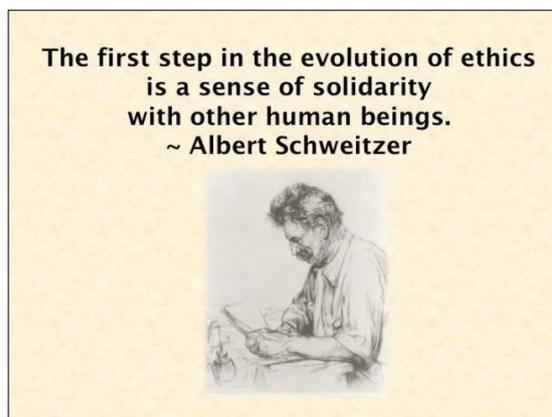
この展示は説明文と写真や挿絵からなる 30 枚のパネル(独英二か国語)から成っており、この博物館の平和ギャラリーで 2 月 6 日から 4 月 16 日まで開催されました。クリスチャン・バートルフはベルリンのガンジー情報センターのドミニク・ミーシンやほかのメンバーの協力を得てこの展示を企画しました。この展示は[こちら](#)で英語版、[こちら](#)でドイツ語版を見ることができます。

反戦に関する書籍出版 500 年記念:『戦争は体験しない者にこそ快し』(1515 年)、『平和の訴え』(1517 年)



アルベルト・シュバイツァーの原爆と 戦争への反対に関する展示

ベルリンの反戦博物館でのエラスムス展示(前述記事参照)の閉会一週間後に同博物館は 4 月 24 日~9 月 24 日に開催する新しい展示について明らかにしました。新展示は「アルベルト・シュバイツァー(1875-1965)とその核兵器・核戦争廃止への献身について」という内容でした。この偉大な人道主義者・博愛主義者は、1952 年にノーベル平和賞を受賞しています。



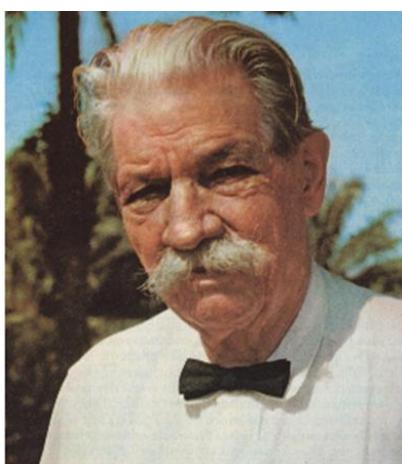
「倫理の進化における最初の一步は、
他の人間と団結しているという感覚だ」
~アルベルト・シュバイツァー

1957 年 4 月 23 日に、彼の「人間性への訴えかけ」はオスロラジオ局と世界中の 80 のラジオ局から同時に放送されました。翌日その訴えはニューヨークタイムズに掲載されました。そのちょうど 60 年後に、この展示会が始まりました。アルベルト・シュバイツァーが核兵器と戦争に対する苦闘に関わり続けたことが、今日の私たちにとっていかに重要かということについて、ステファン・ウォルター博士が開会の辞で強調していました。ウォルター博士はフランクフルト・アルベルト・シュバイツァーセンター基金の副会長を務

めています。この展示はシュバイツァーの人生と仕事の3つの局面に焦点を当てています。

それらは、(1)戦争反対、(2)核戦争反対、(3)命の尊厳の倫理の尊重、です。

この展示でとくに重要な文章は、シュバイツァーが亡くなる直前の演説です。「私の人類に向けての最後のメッセージは、平和と人間性を尊重してほしいという訴えであり、核軍縮を進めてほしいという訴えです。この訴えの尊厳と緊急性は、昔から今まで失われていません。展示会場では、この本文を読むことができるだけでなく、本人の録音(ドイツ語)を聞くことができます。



シュバイツァー博士

この展示はエラスムスに関する展示を制作したチームと同じチームによって制作されましたが、上記の基金から追加支援を受けて制作されています。一般公開講座、コンサート、映画上映会、教会の礼拝などの行事も、この基金で運営されました。これらはベルリンのいくつかの会場で11月まで開催されます。より詳しい情報につきましては、[こちら](#)のアルベルト・シュバイツァー友の会フランスのホームページ、および、[こちら](#)をご覧ください。(赤松敦子訳)



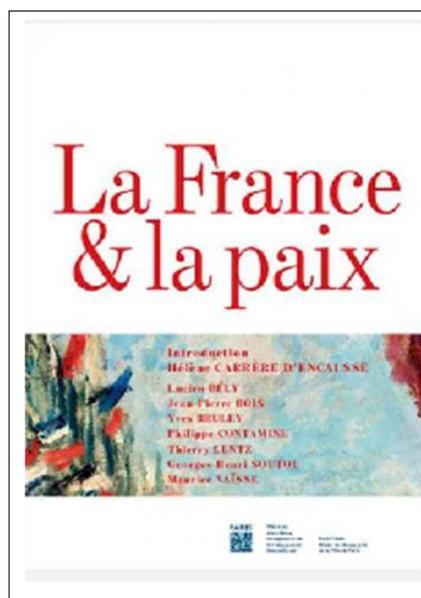
平和の芸術： パリ市立美術館展示

「平和の芸術」というタイトルの主要な展示が2016年10月19日から2017年1月15日パリ市立プティ・パレ美術館で開催されました。



「平和の芸術」パリのプティパレ美術館

この展示の始めの部分では、フランスが今までに関わってきた大規模な戦争の画像を見ることができます。この後に平和が戻ってきたことを寓話的に祝う大絵画の展示室が続きます。芸術作品に加えて、この展示では、100点以上の文書資料も見ることができます。その中には、40の平和条約も含まれています。これはフランスが調印した25,000の条約の中から厳選されたものです。これらの書類はフランス外務省の公文書保管所に保存されていたのですが、今回、初めてこの展示のために貸与されました。



最後のセクションでは20世紀における外交官の役割が取り上げられていました。また、人権、植民地の独立、国連の役割、核抑止力、軍拡

競争、気候変動、そして国際問題を解決するための世界的な政治的相互作用についても展示されています。

展示されていた芸術作品には、パブロ・ピカソの有名な平和の鳩(1950)や、モスクワのトレチャコフ美術館から貸与されたヴァシーリー・ヴェレシチャーギンの『戦争の神格化』もありました。



ヴァシーリー・ヴェレシチャーギン『戦争の神格化』トレチャコフ美術館・モスクワ

この展示には視聴覚資料も含まれていました。また、『平和の芸術外交の秘密と財産』という250の図版を含む330ページの分厚い図録も作成されました。

第2巻は『フランスと平和』で、優れた歴史家が中世から現在にいたるまで平和の概念の発展の跡を辿る評論から成っています。

(赤松敦子訳)

平和と正義のためのハーグ市立博物館 設立計画が却下される

長年、ハーグでは、大規模な市立平和博物館の設立計画が議論されてきました。その平和博物館建設がハーグの国際平和と国際司法の世界の首都としての名声をさらに高めるであろうと期待されていました。最近では、2015年の春にハーグ市は、「人間性の館」(ハーグ市にあるINMPの参加団体)に、年間20万人の来館者が見込める大規模な国際的な博物館を建設することが可能かどうかについての研究を依頼しました。



2016年にハーグ市議会に提出された平和博物館建設計画は必要となる費用が高額であったため、却下されました。その見積もられた投資額は4600万ユーロ(約60億円)でした。その後、元の計画ほど野心的ではない博物館の計画が提出されたのですが、その予算は元の計画の半額でした。

4月に「人間性の館」によって発表された記者会見の声明にあるように、市議会はこの新しく提出された計画も却下し、市立平和博物館設立の見込みはなくなったようです。もしこのプロジェクトが進行していれば、「人間性の館」はその新しい博物館の中に吸収合併されていたでしょう。



The Genève 「人間性の館」の館内劇場

過去数年の経験から、「人間性の館」は現在市内にある国際機関、研究所、文化研究所が協力して、平和に関する魅力的なプログラムを提供できるように働きかけています。「人間性の館」の報告によれば、2016年の同館の来館者数は42,000人(前年比22%増)で、約560の学校関係の団体が来館し、70のプログラムが提供されたということです。人間性の家は活気があり、人気がある平和教育・人権教育のセンターで、幅広い年代の多様な人々が訪れています。1995年以来、ハーグにはイ・ジュン博物館があり、韓国から訪問される方々にとって聖地となっています。これは、日本が韓国の支配を強化し

た後の第二回ハーグ平和会議(1907)で韓国が除外されたことと関連があります。現在、イ・ジュン博物館は改築中ながら、開館されています。来年改築工事が完了すると1階に大展示室ができるので、博物館の総展示面積はかなり増えることとなります。(赤松敦子訳)

ベルギーの新しい博物館 ヨーロッパ歴史館

ヨーロッパ歴史館(HEH)は5月初めベルギー＝ブリュッセルのヨーロッパ議会の近くのレオパルド公園にオープンしました。



同博物館建設プロジェクトは10年以上かけて準備され、5月4日にヨーロッパ議会議長アントニオ・タジャニ氏の手で正式に開館しました。博物館はヨーロッパの人々が共有する過去と多様な経験を理解することに重点を置いています。それば過去200年のヨーロッパ大陸の政治・社会史の共通テーマについての物語を伝えています。展示は19世紀の革命と各国の運動、産業化、世界支配、20世紀の世界大戦と冷戦、ヨーロッパ統合を扱っています。博物館は時に対立する各国の歴史について共通の言説を押し付けようとはせず、歴史と遺産、困難と災害を含む多くの異なるメッセージや言説を提供しています。

ヨーロッパ歴史館は、すべての世代、さまざまな生き方の人々が、ヨーロッパ史やヨーロッパ統合の過程を学び、現在を振り返り、未来を見つめることを目指しています。



タブレット端末装置は、ヨーロッパ連合のすべての言語(24言語)に対応しています。ヨーロッパ歴史館では、ヨーロッパや他の大陸の300の博物館から供給された1500点の資料が展示されています。この博物館には5500万ユーロ(約77億円)かかりました。市のヨーロッパ地区の中心にあり、改装されて大きく拡大されたイーストマンビルにあります。更なる情報は公式[ウェブサイト](#)をご覧ください。建物の構造の短いビデオは[こちら](#)で見ることができます。(吉岡志朗訳)

ベルリンのローザ・パーク記念館再建

かつてアメリカの市民人権活動家ローザ・パークの家があったデトロイトの荒廃した家は、昨年船でベルリンに送られて取り壊しを免れ、再建されてローザ・パークの姪リー・マッコリー出席のもとで4月8日にオープンしました(2016年12月のニューズレター17号の記事を参照)。このプロジェクトはベルリン在住のアメリカ人アーティストであるリアン・メンドーサと妻ファビヤによってなされました。このプロジェクトについての彼女のドキュメンタリーフィルム「ホワイトハウス」は、オーニングプログラムの一部として上映されました。メンドーサは絵画の一部を売却し、10万ドル(約1100万円)以上を工面してこのプロジェクトを篤志事業として行いました。彼は2016-17年の冬の何ヶ月かをかけて、木造2階建ての家をほとんど一人で入念に再建しました。ローザ・パークと夫は、1957年、兄弟と妻(と13人の子どもたち)が住んでいたデトロイトの家に逃げ込み、2年間世話になりました。実は、彼女は、よく知られた不服従行動の後、それまで住んでいたアラバマ州モンゴメリーを離れなければならなかったのですが、その後、あの歴史的な「バス・ボイコット運動」が起きました。(訳者注:1955年12月1日、モンゴメリーの市営バスの「白人優先席」に座っていたローザ・パークスは、運転手に「白人のために席を空けるよう」指示されたが、これに従わなかった。運転手の警察への通報によってパークスは逮捕され

た)。ローザ・パークスがデトロイトに逃げて 60 年後、その小さな家は海を越えてヨーロッパ大陸に「亡命」しました。一時的な仮の場所かもしれませんが、その家は、ベルリンのウェディング地区リーゼナー通り 19 のメンドーサたちの小さな家の庭にあります。彼の家には立ち入れませんが、家から流れる 1950 年代のレコードの音やニュースを聞くことができます。そこには、1957 年にまさにその建物で行なわれたパークス夫妻とのラジオインタビューの抜粋も含まれています。



リアン・メンドーサと妻ファビヤと息子。写真：ゴードン・ウェルター(ニューヨーク・タイムズ)

ベルリンはこのデトロイトからの小さな家を歓迎し、ドイツのいくつかの新聞は 1 面で、またニューヨーク・タイムズも長い記事を掲載しました。

ベルリンは、今日、20 世紀の非暴力や社会正義と平和に関する偉大で象徴的な二人の人物ーローザ・パークスとマハトマ・ガンディーの足跡の地となっています。二人はドイツやヨーロッパの出身ではなく、アメリカとインドの出身であり、その足跡も大いに異なりますが、大変意義深いものです。ガンジーについては、13 頁の記事もご覧ください。(吉岡志朗訳)



リアン・メンドーサとリー・マッコリー、
再建された建物前で
写真：ポーラス・ポニザック
(ベルリン・ツァイトウング)

ケーテ・コルヴィッツの 150 回目の誕生日

20 世紀の有名な反戦画家の一人であるケーテ・コルヴィッツは、1867 年 7 月 8 日、東プロセインのケーニヒスベルク(現在のでロシア連邦カリニングラード)に生まれ、1945 年 4 月 22 日、ドイツのモーリッツブルグで死去しました。第 2 次世界大戦は彼女の生まれ故郷を破壊し、名前が変わってソビエト連邦の一部になりました。彼女はまもなく分割されたドイツの東の部分、ドイツ連邦共和国に位置する都市で亡くなりました。彼女の生誕 150 年は多くの方法、様々な場所で祝われました。ケーテ・コルヴィッツ博物館は、ベルリン UNESCO 委員会と協力して、12-17 才の若いベルリンっ子の絵画コンクール-「コルヴィッツ:ケーテ・コルヴィッツは今ならどのように作品を通して平和を求めたのだろうか」のタイトルのもとで始まりました。子どもたちは、コルヴィッツのように、時代の焦眉の社会的・政治的問題に関する絵画、エッチング、木工、ポスターを作りました。優勝作品はベルリンの博物館で 7 月 8 日発表され、展示されました。(吉岡志朗訳)



広島平和記念資料館の展示リニューアル

2011 年以來、広島平和記念資料館では、それに先立って作成された展示の基本計画に従って、総合的なリニューアルを実施しています。

4月26日、東館展示のリニューアルを終えて再び開館しました。コンピュータを使って、原爆投下の前後の広島市のイメージを示した「白いパノラマ」という新しい映像設備が設置されました。そこではいかに広島市が一瞬のうちに破壊されたのかを示す CG が、5メートル幅の都市のモデルにビデオで 90 秒間示されます。さらに日本語と英語で詳細を示した 34 枚のタッチパネルがあります。同時に本館は常設展示のリニューアルと耐震工事のために、閉館されました。本館は 2018 年 7 月に再び開館の予定です。「1945 年8月6日：原爆による被害の概観」のような本館の展示のいくつかは、現在東館で見ることができます。11月30日まで「新たに寄贈された資料」の展示もされます。今でも被爆者やその家族が大切に保存していた文書、絵画、写真が寄贈されます。それらはしばしば被爆者やその子孫が亡くなった後で寄贈されます。2015 - 2016 年度には、857 点の資料が寄贈され、そのうち 100 点が展示されています。詳細は、資料館の[ホームページ](#)で知ることができます。(山根和代訳)

広島フェニックス号の 引き揚げと修復運動

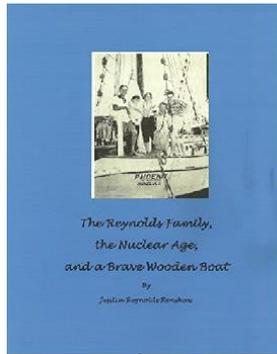
ジェシカ・レイノルズ・レンショーは、1950 年代にアメリカとソ連が行った大気中核実験に抗議して有名になった木製のヨット「広島フェニックス号」を水中から引き揚げ、修復するというわくわくするような運動について報告しました。彼女は 10 代前半でしたが、父親のアール・レイノルズ博士、母のバーバラ、兄のテッド、日本人のヨ

ットマンであるニック・ミカミと、その小さな船で航海しました。それから数十年後の 2010 年、フェニックス号はカリフォルニア海岸に近いサクラメント川に沈んだままです。この運動を進め、必要な資金を調達するために、「広島フェニックス・プロジェクト」の最高責任者であるブライアン・カウデンは、24 分の素晴らしいドキュメント映画を制作しました。そこではレイノルズ一家などがそのヨットで 1967-68 年アメリカによる空爆の犠牲者のために、赤十字社へ医薬品を届けるため北ベトナムへ3回航海したことを詳しく述べています。



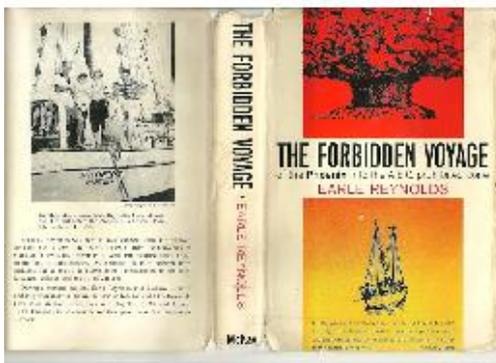
広島フェニックス号

その記録映画は「広島フェニックス号：妨害された冒険旅行」という題名が付けられています。その船を水中から引き揚げて修復し、広島・長崎への原爆投下 75 周年に当たる 2020 年に、再びフェニックス号でマーシャル諸島と広島・長崎へ航海しようと考えています。カウデンは最近何度も、アメリカが 1946 年から 1958 年まで 70 回近くの核実験をしたマーシャル諸島を訪問し、島民の健康と環境に与えた被害を知ろうとしました。修復されたフェニックス号は「動く平和記念物」となり、今後、戦争に対する抗議と平和教育のために、再び平和と核軍縮に向けて航海するでしょう。姉妹船であるゴールデンルールも、同様の活動をするでしょう。同船は 2015 年 6 月に「平和のための復員軍人」という団体によって修復され、再び航海をし始め、カリフォルニア周辺を航海しています。



ジェシカ・レイノルズ・レンショーの本の表紙

アール・レイノルズが書いたアメリカの核実験に家族で抗議した本『禁じられた航海』(The Forbidden Voyage: 1961)は、[ここ here](#) で読むことができます。彼の娘であるジェシカさんは、最近二冊の本を出版しました。『レイノルズ家、核の時代、そして勇敢な木製の船』(The Reynolds Family, the Nuclear Age, and a Brave Wooden Boat)と、『母:バーバラ・レイノルズの良心、勇気、そして思いやり』(MUM: The Conscience, Courage and Compassion of Barbara Reynolds: June 12, 1915 - February 11, 1990)



アール・レイノルズの著書の表紙

この運動と寄付に関しては、[ここ here](#) をご覧ください。上記のドキュメント映画を見ることができます。ベルファストでの第9回 INMP 会議の「平和の船」に関するパネルで、オハイオ州ウィルミントン大学平和資料センター長のターニャ・マウスさんによってフェニックス号の紹介があり、その映画の一部が紹介されました。(バーバラ・レイノルズに関する記事は、2015年8月に出版された INMP 通信をご覧ください)(山根和代 訳)

広島・長崎ヒバクシャ・ピース・マスク・プロジェクト—第1期を終えて 100人のヒバクシャのピースマスク創作

京都の国際 NPO「ピースマスク プロジェクト」は、3期のうちの第1期を終えたことを報告することを嬉しく思います。16か月にわたって、日本各地や韓国で、広島・長崎のヒバクシャと子孫の100点のピースマスクが創られたのです。



被爆二〜四世のマスクも制作されましたが、それは、このプロジェクトの目的が未来の核兵器削減、廃絶であることを表しています。最年長のヒバクシャは91歳で、最年少は8歳の四世でした。韓国、アメリカ、台湾出身の、日本以外のヒバクシャも8人いて、核兵器の標的はまさに、人類そのものであることを強調しました。



100のピースマスクの展示

第1期は、広島で行なわれた最後のワークショップで完遂されました。3月24日〜26日、広島平和記念資料館で100点のピースマスクが展示されたのです。INMP 理事で、立命館国際平和ミュージアム名誉館長の安斎育郎教授が基調講演をし、1945年8月の暗黒の日々から現在の核兵器の脅威に至るまで、そして2017年6月に開かれる国連の議論への希望を述べられました。INMP 理事の山根和代氏が司会を担当し、広島被爆二世として、このプロジェクトへの思いを語りました。

この会の2部では、一〜四世7名がピースマスクプロジェクトの体験について短いスピーチを

しました。韓国やアメリカから来た人もいて、年齢は10歳～91歳でした。それぞれが胸の内を語り、聴衆はプロジェクトの目的を理解することができました。

3部は、プロジェクトチームによるトークで、アーティストの金明姫さん、情報担当の Kya Kim さん、NPO の二葉真弓さんなどがスピーチしました。3人のユース・リーダー、鈴木秀法さん、梶田夏葉さん、中国からの Megan Junyi Jang も、3日間にわたるイベントの成功に貢献しました。



安齋育郎さん、山根和代さんなど、ピースマスクプロジェクトの参加者

ピースマスクプロジェクトは、国内外で第二期に入りました。これまで、二度のINMP国際会議でワークショップや展示を行なってきました。100点のピースマスクの展示や紛争転換や地域主導のアート・ワークショップなど、地方を基盤とした短期のプロジェクトでもよいので、各ミュージアムからの提供依頼を歓迎します。そこには討論、講演、展示も含まれます。

ピースマスクプロジェクトのミッションについて、このサイト [here](#) で読むことができます。プロジェクトの詳しい情報や、展示写真などのpdfファイルを望まれる方は、[Robert Kowalczyk](#) さんか、[二葉真弓](#)さん(日本語)に連絡してください。(寺沢京子訳)



ヒバクシャ証言の英語版について INMP 理事、ノーモアヒバクシャ記憶遺産を 継承する会理事 山根和代

5月22日ジュネーブで、国連の核兵器禁止条約の最初の草案が発表されました。交渉は6月に再開されますが、これらの会議は、継続する核兵器の脅威を知らせるために、非常に重要です。ヒバクシャの証言は、ノーモアヒバクシャ記憶遺産を継承する会の [website](#) で知ることができます。これらの証言が、各地の平和ミュージアムで紹介されることで、ヒバクシャの体験を広く知ってもらうことができるでしょう。

※訳者注:核兵器禁止条約は2017年7月7日、国連で交渉会議参加124か国の評決によって、賛成122:反対1:棄権1で採択され、9月20日以降に批准措置が開始されます。核保有国やその「核の傘」に依存する日本・韓国・ドイツなどは参加しませんでした。

このヒバクシャ証言では、ヒバクシャが自分自身の言葉で原爆の非人道性について語っています。その概要は、以下の通りです。

人類は核兵器と共存できない。このサイトでは、ヒバクシャが体験を話し、書き、描いたものを見ることができます。(注:英語バージョンは、日本語の後にあります。)

(I)「生きたまま焼かれ、死んでいく母を見た」

ヒバクシャ岩佐幹三さんは爆心地から1.2kmの所に居ました。

(II)「68年間、重い十字架を背負って生きてきた」

ヒバクシャ、越智晴子さんも爆心地から1.2kmの所に居ました。

(III) 恐怖の状況で人々はいかに行動したか。

これらのフィルムは、ノーモア ヒバクシャ・プロジェクトによって作られました。日本原水爆被害者団体協議会([website](#))の記憶を継承しています。(寺沢京子訳)



世界中の平和モニュメントと博物館

INMP 会員であるエドワード W. テッド・ロリーズは最近、平和モニュメント(平和博物館を含む)に関する自身の[ウェブサイト](#)を更新しました。



これまでより簡単で、よりカラフルとなり、使いやすくなりました。ホームのページの後ろに7つのページが連なるかたちで構成され、それぞれのページの上下のところのリンクは、メインとなるページと後に連なるページとの間を往復しやすくしています。後に連なるページとは、「国ごとの 3,300 の平和モニュメント」、「年ごとの 2,000 の平和モニュメント」、「テーマごとの多数のモニュメント」、「平和をつくりだそうとする 1500 人の著名な人たち」というタイトルのページです。最後に示したタイトルのページは、アルファベット順や国籍別ばかりでなく、誕生年も配置された 1500 人の総リストです。このリストは、過去に編集され、出版されたとのリストよりも長くなっています。例えば、「225 人の平和をつくりだそうとする芸術家とデザイナーたち」、「117 人の平和を

愛する人たち」、「平和をつくりだそうとして暗殺された 168 人の人たち」、「平和をつくりだそうとした 60 人の著名な人たちが眠る墓」、「45 人の平和学の教授たち」などは、平和をつくりだそうとする人たちの専門ページの一つです。テーマごとのモニュメントがリストになっているページは非常にすばらしく、「ただ面白いだけ」というタイトルのページを含んでいます。それには「見られない平和モニュメント」、「売りだされる平和モニュメント」といったタイトルを含んでいます。「最も高い、最も大きい、最も古い平和モニュメント」、「大学キャンパスの 200 の平和モニュメント」、「平和条約の 41 のモニュメント」といったリストもあります。「150 以上の国際平和会議」のリストでは、関連するモニュメントや記念物の詳細と具体例をあげています。とりわけ興味深く、INMP メンバーに役立つのは「33 カテゴリーからなる 510 の平和のための博物館」のリストです。



テッド・ロリーズ テネシー州・ノックスビルの「テネシー女性参政権記念碑」(彫刻家:アラン・ルクワイア)にて

人々は、主題、分析の緻密さ、そして創作力に対する、著者の余すところないアプローチに感嘆するばかりでしょう。これらのウェブページは、たくさんの数字とタイトルの多様さを通して魅力的に示される“莫大な量の情報を伝える視覚的な百科事典”にも等しい、特色あるものになっています。

これらのページはすべて、学生や基礎研究に携わる人たちが利用して役立てられる多くの情報源となるばかりでなく、多くのアイデアを含んでいます。ピースツーリズムに興味ある人は誰でも、訪問する価値のあるウェブサイトです。それは、数ある中でも、都市や地方のピーストレイルを描いていく材料を提供してくれます。ウェブサイトはまた、自伝的な性質として、2つの新しいページを捉えています。一つは質疑応答を通して現れ、主題とその主題に向き合う意義に対する著者の情熱の起源に、興味深い光を当てています。彼は、シカゴの地理学者であるゾニア・バーバーの薄いブックレットに描かれた平和のシンボルに影響を受け、そのブックレットは婦人国際平和自由連盟(WILPF、1937年)より出版され、40の平和モニュメントがリストとなっていました。80年後、テッド・ロリーズは、ほぼ4,000の平和モニュメントを認定しています。彼はここ10年もの間、平和モニュメントに専心的に向き合ってきたため、祝福・感謝されることでしょう。自分自身が、正に特別な平和モニュメントになったのです。このウェブサイトを維持し、完全な形にさせていくためにも、彼はまだ見ぬ協力者や後継者を招いて、拡張しているところです。私たちは、ここ(geovisual@comcast.net)から連絡をとることができます。(栗山究訳)

女性たちの博物館の国際協会 (IAWM)

INMP 会員であるベッツィ・カワムラは、INMP と幾つかの類似点を示す組織「女性たちの博物館の国際協会」(IAWM)に、私たちの関心を促しています。その起源は、2008年にイタリアのミラノで開催された第1回女性たちの博物館国際会議にさかのぼります。それは全大陸から25の博物館がもとになってネットワークを創り出しました。第4回国際会議が2012年、オーストラリアのアリススプリングスで開催された時、ネットワークは協会に変わり、現在の名称が採用されました。また、世界会議を4年ごとに開催し、その間に大陸間会議を開く方向で開催することが

合意されました。最近では、第5回会議が「女性の博物館：平等の文化のために」というタイトルで、2016年にメキシコシティを会場に、メキシコ女性の博物館の主催で開催されました。第6回会議は2020年、オーストリアのヒッティザウ女性の博物館で開催されることになっています。



2003年、イランでノーベル平和賞を授与されたシーリーン・エバーディーは、協会の名づけ親です。彼女の格言である「女性は世界の歴史を綴る存在です！世界中に女性の博物館がなくてはいけません！」は、協会のモットーとなっています。IAWMは世界中の女性の博物館をつないで、彼女たちの関与を促進していくことを目的としています。現在30の会員博物館で構成され、ウェブサイト上のリストでは、30数カ国で66の女性の博物館が確認されています。多くの博物館は、アメリカ(22館)、ドイツ(6館)、イタリア(3館)そしてオーストラリア(3館)です。詳しい情報は協会のすばらしい[ウェブサイト](#)をご覧ください。

最近のニュース記事として、世界初となる日本軍「慰安婦」博物館会議が中国、フィリピン、韓国、台湾そしてアメリカの参加をもって4月1日に東京で開催されたというレポートがあります。1分のビデオを[ここ](#)から見るすることができます。(栗山究訳)

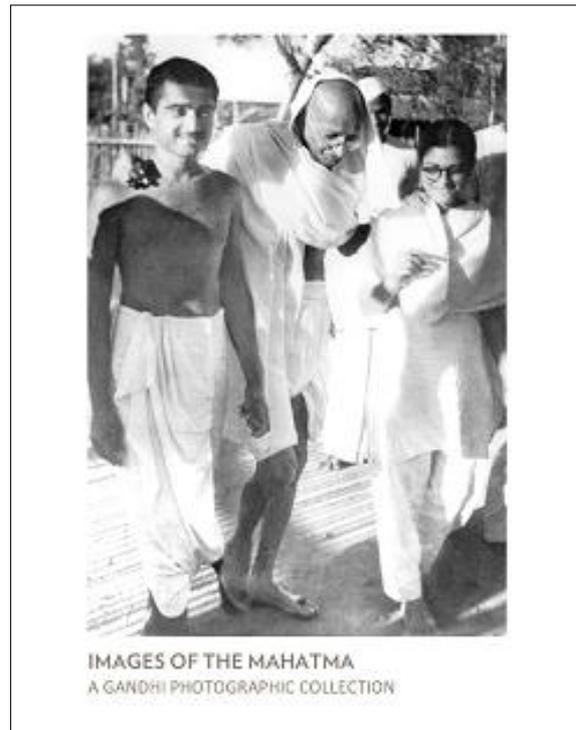


シーリーン・エバーディー

売りに出されるガンジーの写真 重要かつ特色あるコレクション

確固とした由緒ある背景をもつガンジー写真の重要かつ特色あるコレクションが、過去 30 年間の輝かしいコレクションを確立したドイツのガンジー専門家であるピーター・リュウエによって売りに出されています。コレクションは 2 つの異なる部門から成立しています。第一の部門は、マハトマ・ガンジーの 3600 枚以上の印画から構成されています。それは、甥の息子で、彼の様々なアーシュラム(修行場)で成長し、ともに暮らしていたカヌ・ガンジー(1917-1986)の写真コレクションです。1948 年のガンジーの暗殺まで、カヌは彼とともに、彼の間近で働いていた専属スタッフメンバーです。1936 年、カヌはカメラをプレゼントされて以来、趣味としてマハトマの写真を撮っていました。ガンジーは、フラッシュは使わないなど、自身がいかなる状態や状況であっても写真を撮られることを認めており、ポーズをとるよう求めないし、趣味の資金援助もしなかったため、カヌは十分に幸せでした。カヌは、いつでも彼の祖父の写真を撮ってもよい唯一の人で、かくしてカヌは、ガンジーの気分や何らかの瞬間のいっさいを捉えることができたのです。ピーター・リュウエは、1985 年、ラージコート(グジャラート州、インド)にあるカヌと彼の妻・アブハーの自宅を訪問しました。そしてカヌの死後、ピーターは、カヌの未亡人と巨大で特色ある写真コレクションの整理を手伝いました。ピーターは、ある部分は自身の奉仕の報酬として、またある部分は購入を通し、多くの写真を得られ、保護できたので十分に幸せでした。

コレクションの第二の部門も同様に、ガンジーと強いつながりがあります。ガンジーの死後、彼の一番年下の息子であるデヴァダスは、彼の父の日常生活と仕事を文書にするため、写真とフィルムのコレクションを始めました。後に彼は、伝記作家で映像作家のヴィタルブハイ・ジャベ



カヌ、マハトマ、アブハー ガンジー 1945 年
撮影者不明 ガンジーサービス提供

リにこの素材を手渡しました。ジャベリもまた、出版、展示と映画のためにガンジーの映像を集めていました。1985 年にジェベリが亡くなって以来、彼のコレクションは、クリーニング、見出し作成、コンピュータ化などといった科学的処理のため、ピーター・リュウエに送られました。アーカイブはその後、ジャベリの家族に返却されました。ピーター・リュウエは、価値はあるが退屈な仕事に対する報酬として、家族からおおよそ 1,000 枚の写真を受け取りました。リュウエのコレクションは、ガンジーとヴィノバ・ビーヴァの 16mm と 8mm のオリジナルフィルム映像 8 巻、音声記録、芸術作品などの他の品目だけでなく、最も古いとされるガンジーの写真を含む他の資源も含まれています。要するに、リュウエのコレクションは、20 世紀で最も影響力ある人物の一つの特色ある文書記録を構成しているのです。それが現在、売りに出されています。ガンジー家に強いつながりのあるその豊富で多様な中身は、ガンジーと彼の非暴力のメッセージに関して美しく、人びとを勇気づける博物館を創り出すことを目標にしています。インドには

幾つかのガンジー博物館がある一方で、彼の人生を例示することで彼の記憶や非暴力の力に関する学習が求められてやまない世界においては、どこにも存在していません。コレクションとサンプルの詳しい説明のために、[ガンジーコレクション](#)を訪問していただきたいです。

また、豊富に描かれた 30 頁のパンフレットは、[ここ](#)からダウンロードできます。

ピーター・リュウエへの連絡は[こちら](#)へ。

(栗山究訳)

北朝鮮の平和博物館を訪問して

「二つの朝鮮」の国境にある非武装地帯の北側の板門店に平和博物館がありますが、公的な情報はまれです。しかし、最近では西洋からの訪問者が感想やイメージについて長い説明をするようになりました。1953 年 7 月 27 日に休戦協定が調印され、その結果朝鮮半島での戦争が休戦になりました。博物館は、調印された建物の中にあります。北朝鮮の人々は、2年間交渉が行われた大きな小屋(今は「休戦会談ホール」で、会談の際に使用されたテーブルと椅子がある。)は、休戦協定を正式に調印するのにふさわしくないと考え、その隣に2日間かけて新しいパビリオン風の建物を建設し、平和博物館と名付けました。



北朝鮮の平和博物館

そこには大きな部屋があり、その壁には降伏したアメリカ兵、捕らえられたアメリカ人、そして韓国の戦争物資の写真があります。

展示ケースには、署名された休戦協定のコピー2枚(ハングルと英語版)と、調印式の際に掲げられたと言われている旗があります。そこにはまたキム王朝についての展示もあります。その建物の前にある大きな石碑には、「アメリカ帝国主義者が、1950 年 6 月 25 日に引き起こした戦争の休戦署名を英雄的朝鮮人民の前でひざまずいて行なったのは、1953 年 7 月 27 日、ここであった」と書かれています。そこでは訪問者が北朝鮮で語られている言説を知るように展示されています。博物館の入り口の上には、鳩のシンボルがあります。休戦協定の調印の際、ピカソの「鳩」の絵のコピーが建物の中に展示されていました。しかし、アメリカがそのシンボルとピカソの共産主義との関係を理由に反対したため、カバーがかけられました。



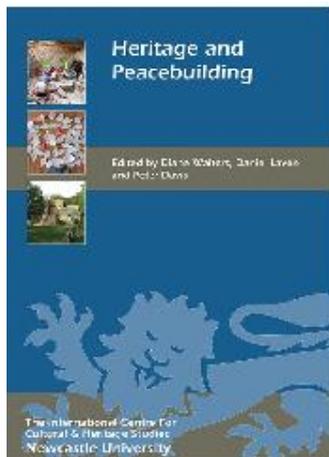
北朝鮮の平和博物館、記念碑、そして最近板門店を訪問した人々

訪問者の報告は、次の3人のブログをご覧ください(英語です)。[The Wandering Wombat](#), [At Home in the Wasteland](#) そして [Earth's Nutshell](#).

(山根和代訳)

最近の出版物

これまでいくつかの記事で新しい出版物を紹介してきましたが、重要な本として *Heritage and Peacebuilding* (遺産と平和構築) という本があります。編集者は Diana Walters, Daniel Laven, Peter Davis です。(Woodbridge, Suffolk, U. K. : The Boydell Press, 2017, pp. 255). 「重要な遺産」と題した本の第 21 巻では、21 世紀に直面する国際的な課題の中で文化遺産を取り上げています。この本はイギリスのニューキャッスル大学国際文化遺産研究センターとの協力で出版されました。その本では遺産がもっと平和的な社会に貢献できるかどうかを探求しています。



20 ほどあるエッセイのうちいくつかは、博物館と平和について取り上げています。例えば、「平和の遺産: 平和の文化の発展における平和博物館の重要性」、「平和のための展示の企画」、「博物館は平和を構築できるか? 平和構築と国際協調主義における博物館の役割」、「平和の妨害: 博物館、民主主義、紛争回避」があります。またケニヤ、バルカン諸国、北アイルランドにおける遺産、平和構築、博物館に関する事例研究もあります。幾人かの執筆者は、INMP の元理事や現在の理事です。(Timothy

Gachanga, Sultan Somjee, Peter van den Dungen). 詳細はここ [here](#) をご覧ください。

故人について

元沖縄県知事大田 昌秀氏亡くなる

元沖縄県知事で平和の主張者であった大田昌秀氏が 6 月 12 日に亡くなりました。その日はちょうど 92 歳の誕生日でした。1998 年第 3 回国際平和博物館会議が大阪と京都で開催された際、17 名の INMP のメンバーが国際会議組織委員会に招待されて沖縄へ行き、大田知事に会う機会がありました。彼は沖縄出身で琉球大学の教授となりましたが、沖縄戦や日米関係に関する多くの著書があります。1990 年に退職後無所属で沖縄知事に選ばれ、米軍基地の沖縄占領に対して日本政府に抗議してきました。彼は参議院選挙で当選し、2007 年まで国会議員として活躍しました。その後那覇市に沖縄国際平和研究所を創設し、そこには戦争と平和に関する写真が約 5000 枚展示されています。2017 年に彼はノーベル平和賞候補になったと言われていました。安齋育郎教授 (INMP 諮問委員) は、2017 年 6 月 15 日のお別れ会に参列しました。そこには現職の知事を含め多くの人々がこの尊敬すべき学者で政治家であった大田氏を哀悼しました。



編集者より



この通信は年 4 回発行されています。皆さんの投稿をお待ちします。次のメール・アドレスに送信して下さい。 news@museumsforpeace.org

その際お名前と団体をお知らせ下さい。

編集後記

今回の和訳には、山根和代を含め、赤松敦子さん、栗山究さん、寺沢京子さん、吉岡志朗さんがボランティアで関わって下さいました。心よりお礼申し上げます。

日本語版の発行が予定よりも遅れましたことをお詫び申し上げます。

INMP の日本支部の事務を担当している安齋科学・平和事務所 (Anzai Science & Peace Office, ASAP) が 2017 年 7 月から下記アドレスに移転しました。ご連絡は下記あてにお願いします。

〒603-8577
京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学国際平和ミュージアム内
名誉館長 安齋育郎 (INMP 担当)

FAX またはメールでのご連絡には、下記をご利用ください。その際、必ず、「INMP 関係」と明示して頂ければ幸いです。

FAX 075-465-7899 (安齋育郎宛明記)
メール info@asap-anzai.com

今後の発行予定

INMP はニューズレターを年 4 回発行しています。英語版の発行には、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、山根和代、ロバート・コワルチェック、安齋育郎が当たっています。日本語への翻訳は、今号と同様、山根和代 INMP 執行理事を中心に、ボランティアの方々の協力を得て行なっています。最終的な編集(翻訳内容のチェック、レイアウトの調整、記事の追加など)は安齋育郎 INMP 諮問委員が行なっていますが、出来るだけ英語版に近い翻訳を心掛けているものの、日本語版固有の注釈や補足的な説明を加えたりするため、原文の逐語訳とは異なる場合があることを付記します。

予定より大幅に遅れていますが、現在、INMP 設立 25 周年記念号(ニューズレター 18 号)の日本語版が準備されつつあります。英語版で 50 頁の大部なもので、翻訳も容易ではありませんが、「INMP25 年史」や「関係団体や個人からの 25 周年記念メッセージ」なども収録されており、出来るだけ早くお届けしたいと思います。

すでに英語版ではニューズレター 20 号の編集が始まっています。今後も日本語版の発行に努力しますので、よろしく願います。

INMP は、現在、組織改革を進めつつあります

「平和のための博物館国際ネットワーク」(International Network of Museums for Peace, INMP) は、より安定的な運営を可能とするため、組織・財政活動の見直しを進めつつ、将来計画の策定に取り組もうとしています。そのために、ロイ・タマシロ(アメリカ)、クライブ・バレット(イギリス)、安齋育郎(日本)をメンバーとする「戦略グループ」(Strategy Group)が立ち上げられ、現在、「再建」ともいべき抜本的な改革論議の途上にあります。

今後、INMP が世界の平和のための博物館のネットワークングにより効率的に取り組めるためには、平和博物館に関心を寄せる方々の協力や積極的参画が不可欠です。

2020 年に開催を予定されている第 10 回 INMP 国際会議は、ネットワーク革新のための重要な機会になると思われませんが、日本での開催の可能性を含めて検討が進められています。日本の平和博物館関係者の皆さんの積極的な提言、ご支援、ご協力を期待します。